

王陵の地域史研究

～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅷ～

2014

例 言

- 1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査と踏査である。主な調査地は以下の通りである。
 - ・カセヤ塚古墳 奈良県高市郡明日香村大字奥山308
 - ・神明神社古墳 奈良県葛城市寺口大字和田1089
- 2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査・資料収集等に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)
相原嘉之、泉森 皎、猪熊兼勝、上田裕人、河上邦彦、神庭 滋、木下 亘、辰巳月美、土橋理子、徳田誠志、豊岡卓之、長谷川透、福尾正彦、吉田陸久、米川弘次、米田文孝
- 3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍」と奈良国立文化財研究所発行の「奥山」(1:1000)、明日香村都市計画図(1:2500)を使用した。
- 4、本書の執筆は西光慎治、辰巳俊輔があたった。
- 5、石室測量図の製図は西光慎治・辰巳俊輔が行った。
- 6、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 7、本書の編集は西光慎治が担当した。

目 次

例言 目次	(42)
第1章 調査に至る経緯と目的	(43)
第2章 飛鳥地域の測量調査	(44)
第1節 地理的・歴史的環境	(44)
第2節 カセヤ塚古墳踏査報告	(49)
1、はじめに	(49)
2、測量調査報告	(49)
3、表採遺物	(49)
第3節 檜隈大内陵兆域石標について	(51)
1、はじめに	(51)
2、「兆域」石標について	(51)
3、まとめ	(51)
第4節 神明神社古墳測量調査報告	(54)
1、はじめに	(54)
2、測量調査報告	(54)
3、表採遺物	(54)
第5節 奥山久米寺転用礎石について	(59)
1、はじめに	(59)
2、転用礎石について	(59)
3、まとめ	(59)
第3章 総括	(62)

第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学文学部考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意・ご協力のもと測量調査・踏査を実施したものである。調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成25（2013）年4月～平成26（2014）年1月にかけてのべ15日間行った。

【調査体制】

担当者	西光慎治・辰巳俊輔	西光慎治・辰巳俊輔
調査員	上田裕人	上田裕人

調査体制は以下の通りである。

【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、岩屋山古墳、打上古墳、カヅマヤマ古墳、カンジョ古墳、艸墓古墳、権現堂古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、新宮山古墳、谷首古墳、谷脇古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、真弓籬子塚古墳、マルコ山古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳、都塚古墳

第2章 飛鳥地域の測量調査

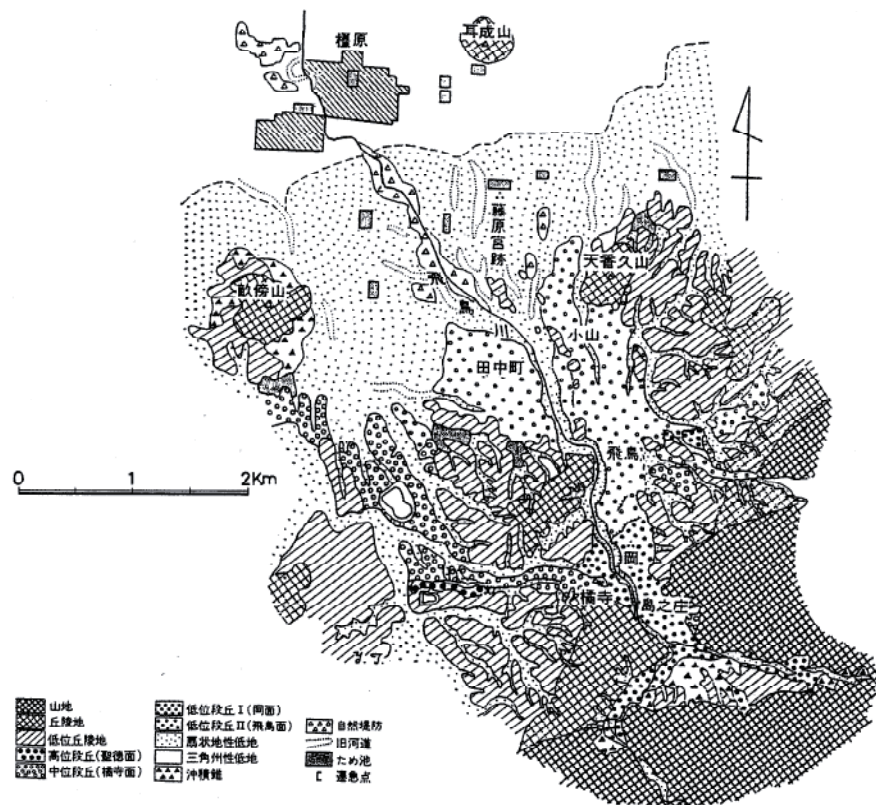
第1節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曾我川に流れ込んでいる。



第1図 明日香村周辺地質図

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

飛鳥地域は飛鳥川と高取川を中心に肥沃な段丘面が形成され、ここを基軸として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。まず、高取川流域では縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した松前脇田遺跡をはじめとして、飛鳥川流域では飛鳥池遺跡で草創期の有茎尖頭器と木の葉形尖頭器が出土している。中期～晩期にかけては稲淵ムガンダ遺跡・坂田寺下層遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡等が存在し、集石遺構や竪穴式住居、土器棺などが検出されている。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥川流域では飛鳥京下層遺跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。冬野川の上流域でV様式系甕が出土したとされており、周辺に集落が存在していた可能性がある。高取川流域では御園アライ遺跡（中期）で土坑などが検出されている。そして、飛鳥時代前夜となる古墳時代がはじまる。

〈古墳時代〉

飛鳥地域の古墳時代については現段階ではまとまった遺跡は確認されていない。そういった中であって坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橋遺跡や島庄遺跡、川原寺下層遺跡、甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡、阿部山遺跡群等でも竪穴住居や古式土師器、韓式系土器、滑石製玉類や土坑などが検出されている。高取川流域では御園アライ遺跡や松前タバタ遺跡で竪穴式住居や古式土師器が検出されている。飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。飛鳥京周辺でも酒船石遺跡や雷丘、甘樫丘等で形象埴輪や普通円筒が出土しており、宮殿造営に伴って削平、消滅した古墳が多く存在していたことがわかる。さらに飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約50mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曾我川の支流、前川の上流部では6世紀中頃に造営された真弓籬子古墳がある。真弓籬子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぶ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。前川の右岸ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開し、左岸にあるスズミ1号墳からもミニチュア炊飯具が出土するなど、前川を中心とした周辺の古墳群は東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊飯具や釵子が



- 1.岩屋山古墳 2.真弓和田古墳 3.小谷古墳 4.益田古墳 5.沼山古墳 6.牽牛子塚古墳 7.越塚御門古墳 8.真弓鎌子塚古墳 9.与楽古墳群
- 10.スズミ1号墳 11.スズミ2号墳 12.カヅマヤマ古墳 13.マルコ山古墳 14.真弓テラノマエ古墳 15.佐田遺跡群 16.東明神古墳
- 17.佐田2号墳 18.佐田1号墳 19.出口山古墳 20.森カシタニ遺跡 21.森カシタニ塚古墳 22.向山1号墳 23.薩摩遺跡 24.松山呑谷古墳
- 25.清水谷遺跡 26.ホラント遺跡 27.阿部山遺跡群 28.稲村山古墳 29.観堂寺遺跡 30.キトラ古墳 31.阿部山廃寺 32.吳原寺跡
- 33.檢前門田遺跡 34.檢前遺跡群 35.檜隈寺跡 36.坂ノ山古墳群 37.檢前上山遺跡 38.御園チシヤイ遺跡・御園アライ遺跡 39.塚穴古墳
- 40.高松塚古墳 41.火振山古墳 42.中尾山古墳 43.平田キタガワ遺跡 44.梅山古墳 45.カナヅカ古墳 46.鬼の俎・雪隠古墳
- 47.野口王墓古墳 48.川原下ノ茶屋遺跡 49.亀石 50.西橋遺跡 51.定林寺跡 52.菖蒲池古墳 53.五条野宮ヶ原1-2号墳 54.五条野宮イ古墳
- 55.五条野城跡古墳 56.五条野内垣内古墳 57.榎山古墳 58.五条野丸山古墳 59.輕寺跡 60.石川精舎 61.檀原遺跡 62.田中廃寺
- 63.和田廃寺 64.雷丘北方遺跡 65.大官大寺跡 66.カセヤ古墳 67.庚申塚古墳 68.山田寺跡 69.上の井手遺跡 70.奥山リウゲ遺跡
- 71.奥山久米寺跡 72.雷丘東方遺跡 73.雷丘 74.豊浦寺跡 75.石神遺跡 76.飛鳥水落遺跡 77.飛鳥寺跡 78.飛鳥東垣内遺跡 79.竹田遺跡
- 80.小原宮ノウシロ遺跡 81.八釣・東山古墳群 82.東山マキド遺跡 83.全鳥塚古墳 84.飛鳥池工房遺跡 85.酒船石遺跡 86.飛鳥京跡
- 87.飛鳥京跡苑池遺跡 88.甘樫丘東麓遺跡 89.川原寺裏山遺跡 90.川原寺跡 91.橋寺跡 92.東橋遺跡 93.島庄遺跡 94.石舞台1~4号墳
- 95.石舞台古墳 96.馬場頭古墳群 97.打上古墳 98.都塚古墳 99.戎成組田古墳 100.坂田寺跡 101.飛鳥稲淵宮殿跡 102.塚本古墳
- 103.朝風廃寺 104.稲淵ムガンダ遺跡

第2図 飛鳥地域周辺遺跡分布図

出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接してある観音寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

〈飛鳥時代〉

飛鳥時代の7世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓から越智丘陵では精美的な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳や石英閃緑岩の刳り貫き式横口式石槨を有した越塚御門古墳などが存在している。さらに南方には多角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた東明神古墳、蔵骨器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳や真弓テラノマエ古墳が点在している。真弓テラノマエ古墳では棺台と玄室床面に平瓦が使用されている。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓が東西に並んで築かれており、南方には八角墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。さらに高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。

飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。国家寺院としては百濟大寺（吉備池廃寺）が造営され、その法灯は高市大寺、大官大寺、奈良大安寺へと繋がれていく。その他、齊明天皇の菩提を弔うために川原宮の跡地に川原寺が造営される。また宮殿も乙巳の変の舞台となった飛鳥板蓋宮や齊明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設と石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河の上流に約1kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池工房遺跡が存在する。飛鳥池工房遺跡は7～8世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立され、周辺の檜前大田遺跡では大壁状遺構や7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。

〈奈良時代以降〉

奈良時代以降の飛鳥地域の様相については西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移ると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸樺の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。阿部山遺跡群では11～13世紀代にかけての白磁碗を使用した火葬墓や一辺約4mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁碗等が出土している。中世以降になると橘寺や川原寺、飛鳥寺など飛鳥の景観を形成してい

た堂塔伽藍が落雷等により相次いで焼失し、飛鳥の風景が大きく変貌していく。南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しており、この時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観音寺城が築かれるようになる。近世になると伊勢や吉野などの寺社を往来する旅人の案内として分岐点に道標が設置される。西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。

第2節 カセヤ塚古墳踏査報告

1. はじめに

カセヤ塚古墳は奈良県高市郡明日香村大字奥山308に所在する古墳である。カセヤ塚古墳については、1923（大正13）年に刊行された『高市郡古墳誌』に、「現今全く荒廢に歸して雜木林をなして居る。面積約二段四畝歩あつて、中央部に偏する所に窪地があつて、内部には石槨石棺が存在して居るともいふが存否は審ではない。古來口碑に古墳であると傳へられて居るが、何人の墳塋であるか不明である。圓形古墳であつて、高さ五間根廻三十間許ある。西方に崩壊せる所があつて、此處から古刀などが出たといつて居る。大正元年十二月、この東側なる畑地から圓筒埴輪六個を發掘し現に奈良女子高等師範學校及び高市郡教育博物館に各一個を蔵められている。」と記されている。現在、この円筒埴輪についての所在は不明であるが、当時を知る地元の方の話では円筒埴輪はそれほど大きくものではなく、小さい埴輪であったようである。

2. カセヤ塚古墳踏査報告

カセヤ塚古墳は東から西へ派生する尾根の先端頂部に築かれている。頂部は東西約18m、南北約20mの平坦面を形成している。現状では墳丘を示す明確な高まりはみとめられないが丘陵全体が墳丘と仮定した場合、東に前方部を有する前方後円形と考えることもできる。ただ東側については開墾等の削平や竹が密集しているなど詳細については不明である。現在の頂部の平坦面には、東側にU字状に開く長さ約6m、幅3m、深さ約1mの盗掘坑が存在している。周辺には拳大から人頭大の川原石が散乱しており、埋葬施設に用いられていた石材の可能性が考えられる。

3. 表採遺物

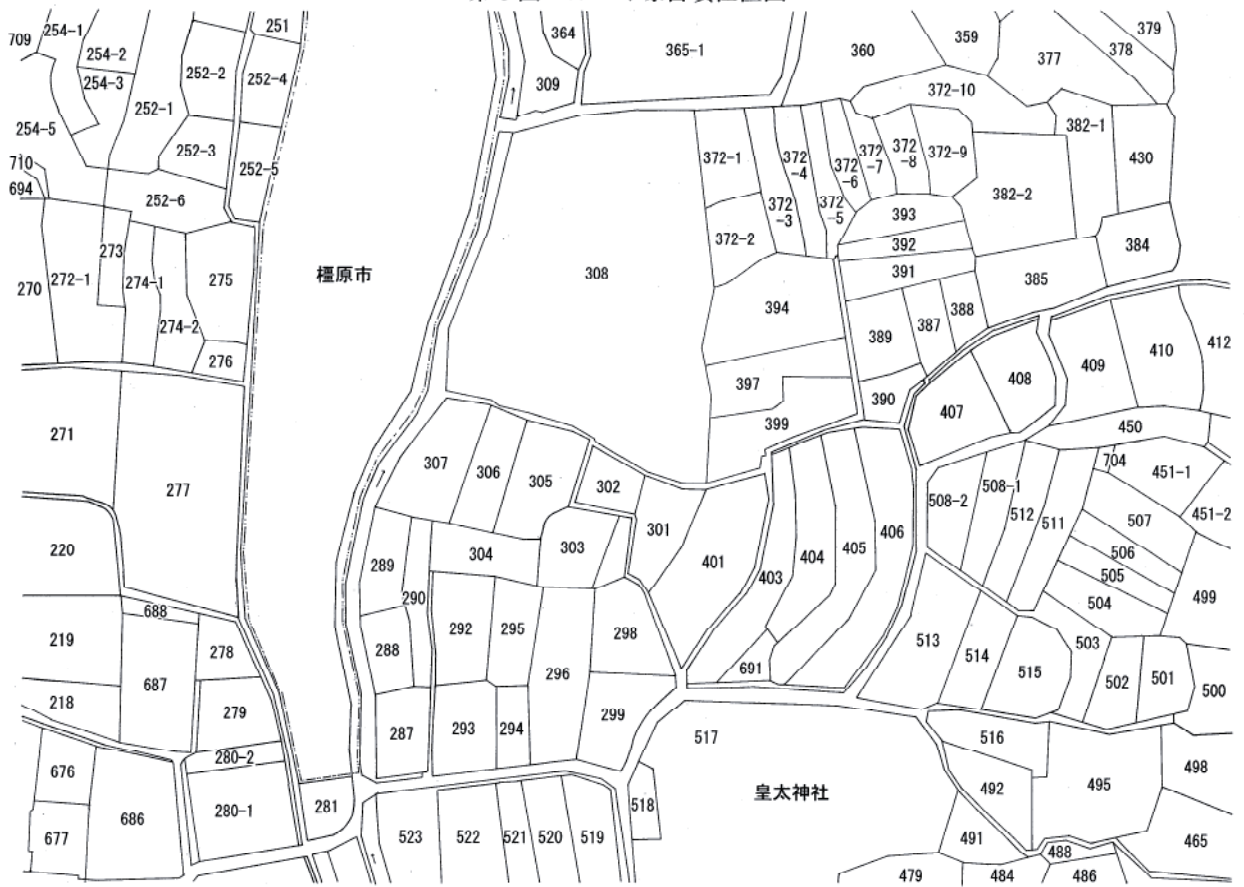
今回、古墳の存在する丘陵について広範囲に踏査を行ったが、『高市郡古墳誌』に記されている埴輪等の遺物を表採することはできなかった。

【引用・参考文献】

高市郡役所編1925 『高市郡古墳誌』



第3図 カセヤ塚古墳位置図



第4図 カセヤ塚古墳周辺地籍図

第3節 檜隈大内陵「兆域」石標について

1. はじめに

平成23年に村内全域の道標の調査のため踏査していた際、大字野口の集落内で道標とは異なる石標を発見した。この石標は根元から倒れた状態で道路脇に置かれており、設置されていたと思われる場所には窪んだ穴が存在している。石標の周辺には武烈天皇を祀る小泊瀬稚雀神社や檜隈大内陵の野口王墓古墳などが存在している。ここではこの石標について報告していく。

2. 「兆域」石標について

石標は花崗岩で作られた角柱型である。規模は長さ34cm、幅12.5cm、厚さ12cmを測る。四面中一面のみ丁寧に磨かれており、そこには「御陵兆域」の四文字が刻まれている。設置年月日や設置者等の文字は確認できない。

3. まとめ

村内に点在する60基の道標の内、陵墓に関する道標は大字川原に1基存在している。陵墓に関する道標については一般的な御陵までの距離を示したものであり、今回のように「御陵兆域」と刻んだ道標は確認されていない。兆域とは陵园の範囲で礼拝施設や景観、墓守の生活域などを含む中国の思想をもとにした広義の墓域を指している。『延喜式』諸陵寮には天武天皇・持統天皇の檜隈大内陵の兆域は東西五町、南北四町と記されている。また、檜隈大内陵の兆域に接して欽明天皇の檜隈坂合陵の東西四町、南北四町の兆域がある。この二つの兆域内には4基の古墳が西から梅山古墳（檜隈坂合陵）、カナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳・野口王墓古墳（檜隈大内陵）が横一列に整然と配置されている。これらの古墳が存在する今城谷の一角に今回の「兆域」を記した石標が存在している。さらに石標の設置されている場所は野口王墓古墳の東側にあり、檜隈大内陵の兆域の東西五町の推定ライン上に位置していることから、この石標は檜隈大内陵の兆域を表した石標であった可能性が考えられる。確認した石標は1基のみであったが檜隈大内陵の東西五町、南北四町の範囲で他にも兆域を示す石標が存在しているのか、また設置者や設置理由など詳細については明らかとなっていない。今後、さらなる周辺部の踏査を行い検証していきたい。

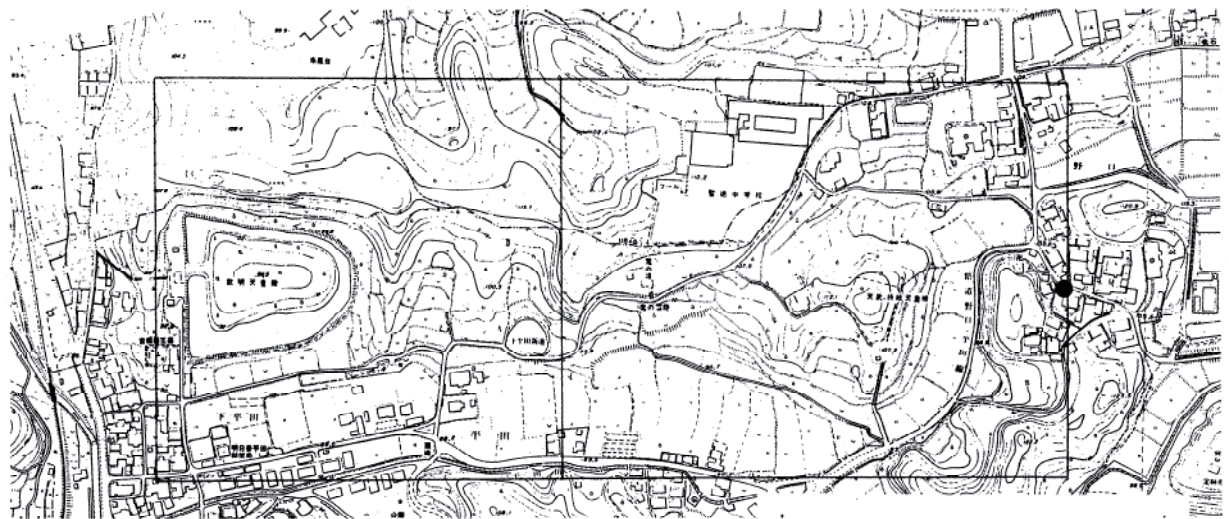
【引用・参考文献】

西光慎治2000 「飛鳥地域の地域史研究（1） 欽明天皇檜隈坂合陵・陪冢 カナヅカ古墳の覚書」『明日香村文化財調査研究紀要』創刊号 明日香村教育委員会

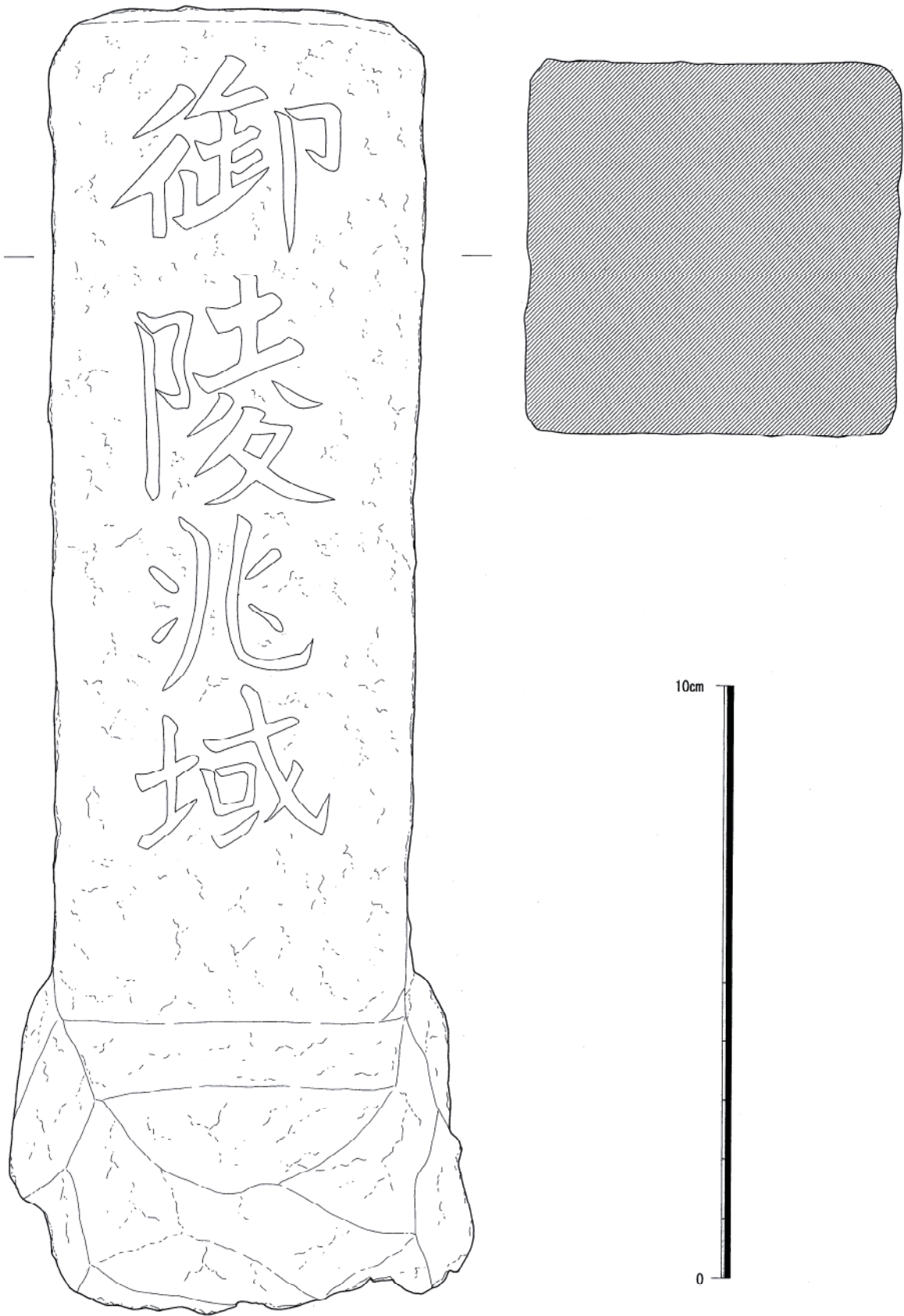
西光慎治2002 「飛鳥地域の地域史研究（3） 今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』第二号 明日香村教育委員会



第5図 檜隈大内陵「兆域」石標位置図 (●印)



第6図 檜隈坂合陵・檜隈大内陵兆域推定図



第7图 檜隈大内陵石標実測図

第4節 神明神社古墳測量調査報告

1. はじめに

神明神社古墳は奈良県葛城市寺口大字和田1089に所在する終末期古墳である。この古墳については奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査が実施されており、詳細な報告が行われている（泉森1981）。神明神社古墳の埋葬施設は石英閃緑岩の切石で築かれた7世紀後半の横穴式石室で飛鳥地域の同時期の終末期古墳として野口王墓古墳が挙げられる。野口王墓古墳の埋葬施設については『阿不幾乃山陵記』に内陣と外陣から構成されており、床面には床石が存在していたことが記されている。神明神社古墳では床石は存在していなかったが野口王墓古墳の埋葬施設との関わりが注目される。今回、野口王墓古墳を考える上で重要な神明神社古墳について観察・実測する機会を得たので報告していく。

2. 測量調査報告

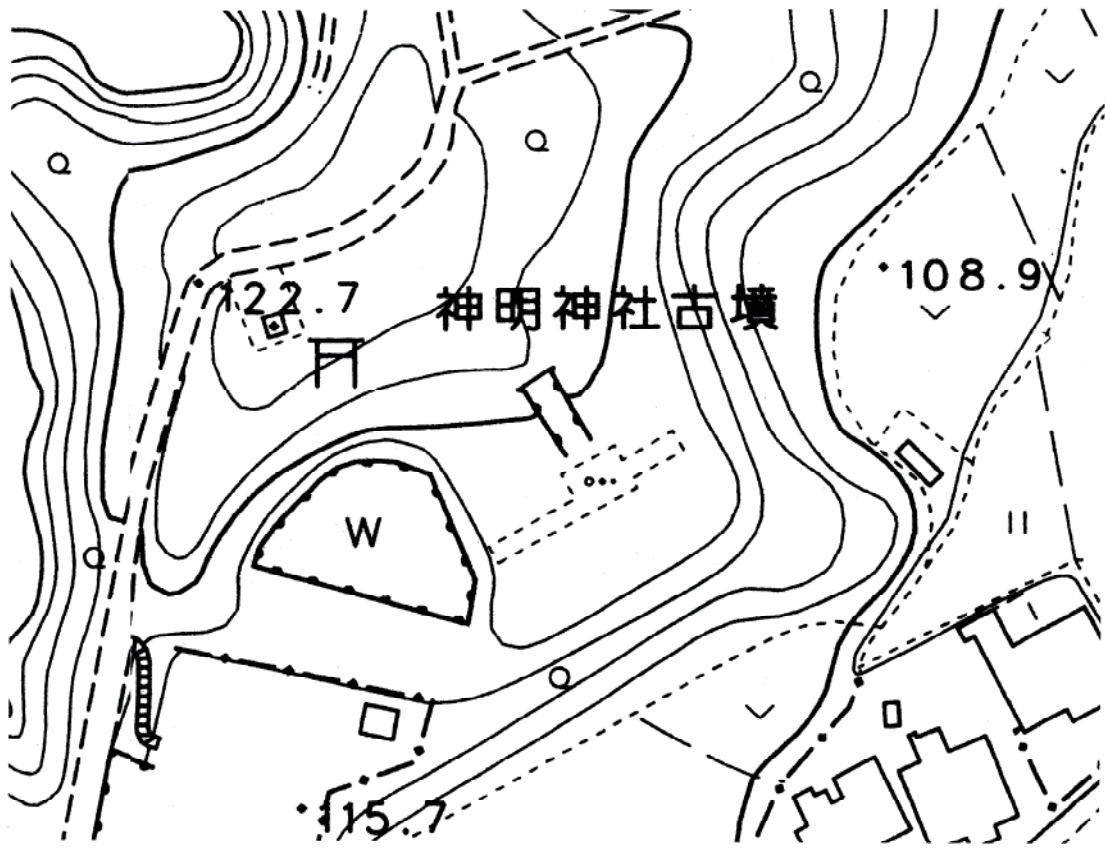
埋葬施設は南に開口する石英閃緑岩の切石を用いた横穴式石室である。石室は一段積みで、奥壁が1石、左右側壁と天井がそれぞれ2石ずつの合計7石で構成されている。各石材の接合面には漆喰が充填されており、側壁及び天井の一部に残存している。石室の規模は現状で左側壁6.18m、右側壁5.40m、奥壁の幅1.94m、開口部の幅1.75m、高さ1.80mを測る。天井石と側壁が接する箇所では、天井石が幅5cm、深さ1.5cmほどに段状に加工が施されている。このことから、石室を構築する際に一定の規格を以て加工が行われていたことがわかる。さらに両側壁の2石目壁面にも最大幅12cm、深さ1cmほどの段状の加工が施されている。これらは奥壁からは約3mの位置にあり、扉石等が存在していた可能性が想定される。また両側壁及び奥壁において、天井から約1.3mまで精美な加工が施されており、それ以下では同様の加工が行われておらず、ほとんどが未加工・未調整となっている。これは築造当時の床面が未加工部分までで、見える箇所とそれ以外とを区別して加工が行われていたと考えられる。また、右側壁の前端部は整美な加工面が認められるが、左側壁の前端部は加工面が認められない。さらに、奥から2石目の天井石の端面には幅20cm程度の丁寧な加工が施されており、これらは開口部の閉塞に関わるものと考えられる。

3. 表採遺物

今回の測量調査では表採遺物等は確認できなかった。

【引用・参考文献】

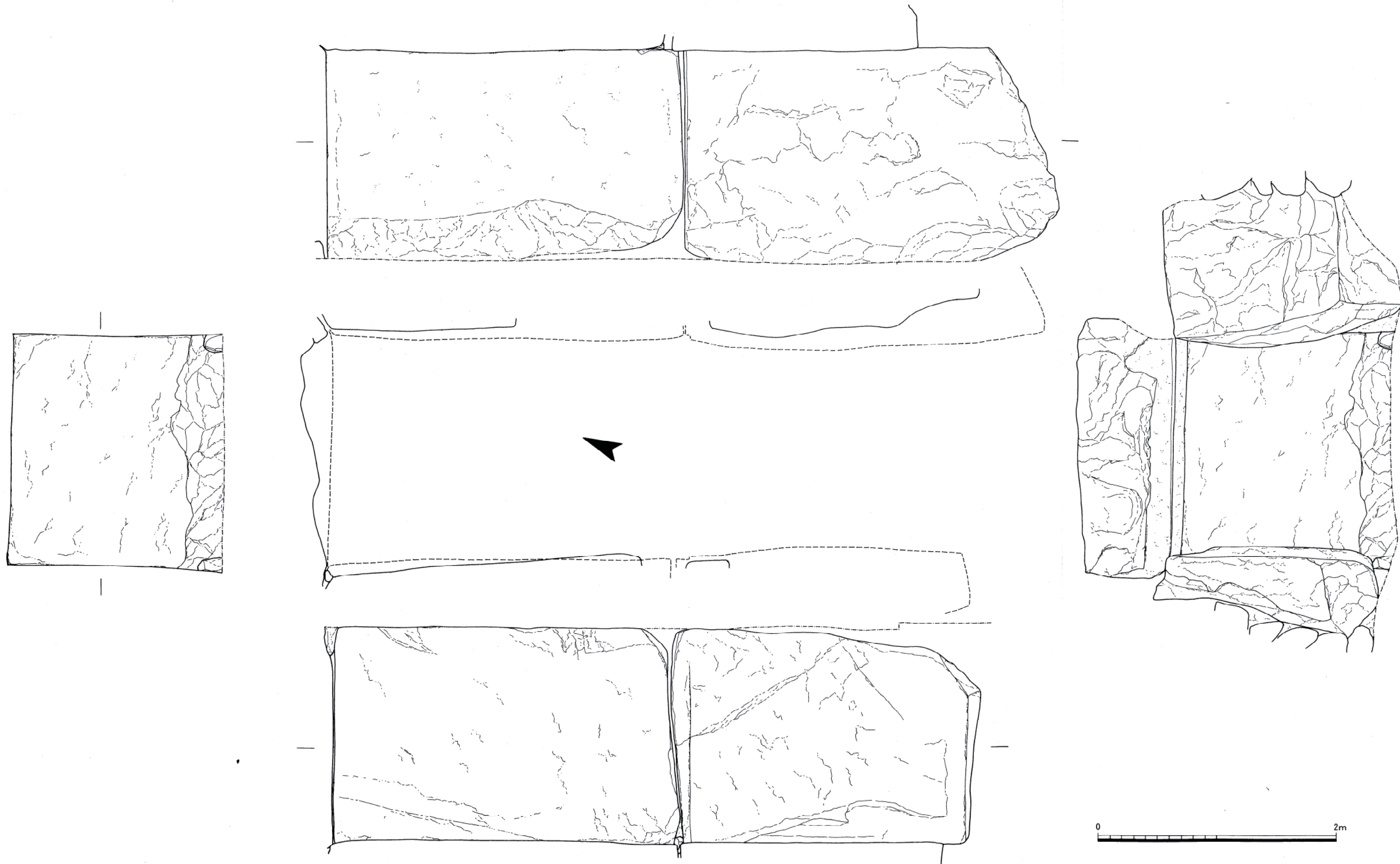
泉森 皎1981 「新庄町 寺口千塚・新池支群発掘調査報告－付 神明神社古墳発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報1981年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所



第8図 神明神社古墳位置図



第9図 神明神社古墳周辺地籍図



第10図 神明神社古墳埋葬施設実測図

第5節 奥山久米寺転用礎石について

1. はじめに

奥山久米寺は奈良県高市郡明日香村大字奥山に所在する飛鳥時代の寺院である。奥山久米寺は四天王寺式伽藍配置で、塔跡には鎌倉時代に建立された十三重の石塔が存在している。奥山久米寺については造営までの経緯や造営者など詳細については明らかではないが、現在の奥山大字集落のほとんどが寺域内に含まれることから、当時有数の規模を誇った寺院であったことは間違いない。奥山久米寺の礎石についてはこれまでも集落の西側を北流する「中の川」にかかる橋の下や川岸に礎石が転用されていたことが知られている。

今回報告する礎石は奥山集落内を南北に伸びる道から皇太神神社へと東へ曲がる場所に位置し、現在は個人住宅の石垣に使用されている。転用された礎石の半分程度は地下に埋没した状態となっている。今回、実見する機会を得たので報告したい。

2. 転用礎石について

転用されている礎石についての材質は石英閃緑岩である。規模は幅60cm以上、高さ36cm以上、厚さは約20cmで、石材の半分程度は水路の下に埋没している。現状では石材の中央に直径約24cm、深さ約10cmの枘穴があり、周囲は丁寧に磨かれている。磨かれた範囲は枘穴を中心に四角く磨かれている。

3. まとめ

転用されている礎石については一般的な円柱座を有した礎石ではないことから、柱を立てる礎石ではなく、扉などの軸をうける枘穴を有した唐居敷とも考えられる。こういった石材は酒船石遺跡の南方の山裾でも確認されており、寺院等に使用されていた礎石が後世に転用されたものと考えられる。

【引用・参考文献】

石田茂作1936 『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房

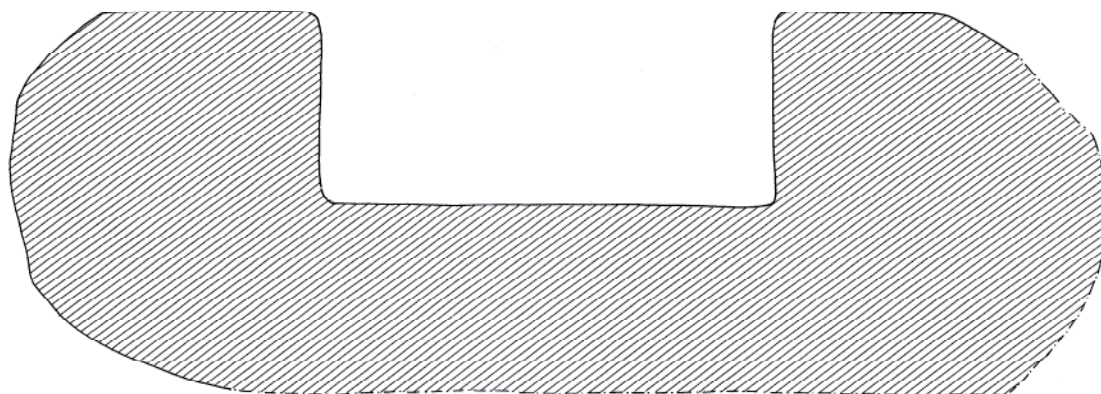
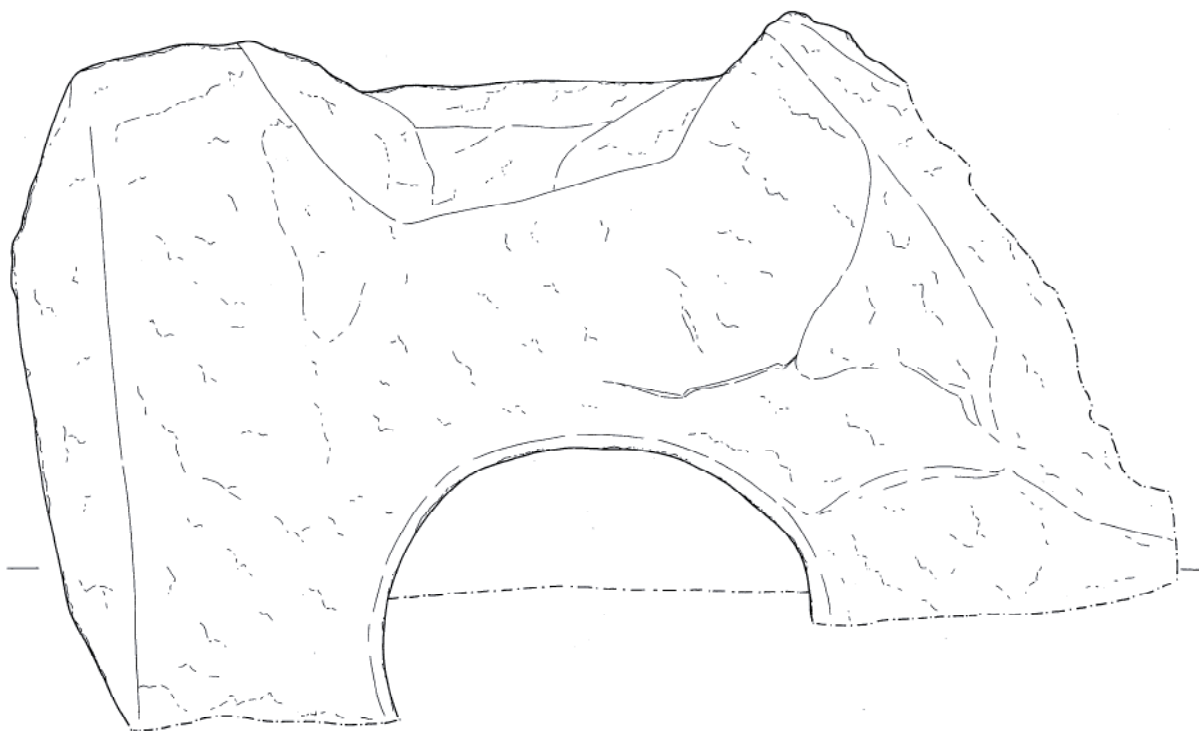
明日香村教育委員会2006 『酒船石発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第8集



第11図 奥山久米寺転用礎石位置図 (●印)



写真1 奥山久米寺転用礎石



第12図 奥山久米寺転用礎石実測図

第3章 総括

王陵の地域史研究も今年で16年目を迎えた。これまで飛鳥地域の多くの後・終末期古墳の測量調査を実施し、時には明日香村以外の周辺地域の古墳の測量調査を通じて飛鳥地域の後・終末期古墳との比較研究を行ってきた。今回は昨年宮内庁により過去の調査結果が『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』に発表され、注目を集めた野口王墓古墳の埋葬施設を考える上で重要な神明神社古墳について測量調査を実施することができた。これは現在、宮内庁陵墓治定地内の埋葬施設の構造については不明な点が多いが、同時期の周辺地域の終末期古墳を検証することで飛鳥の王陵研究にとっても有効な手法であると考えられる。また、測量以外でも村内をくまなく踏査することにより、これまで遺跡の希薄であった地域で新たに遺跡を確認することができた事例も少なくない。今後も継続して飛鳥地域の後・終末期の測量調査と踏査を行い、飛鳥地域の地域史像解明に向けた基礎資料の充実を図っていきたいと考えている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう						
書名	王陵の地域史研究						
副書名	飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅷ						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編者名	西光慎治編						
著者名	西光慎治、辰巳俊輔						
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課						
所在地	〒634-0141 奈良県高市郡明日香村大字川原91-3 TEL 0744-54-5600 FAX 0744-54-5602						
発行年月日	西暦2014（平成26）年3月28日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
カセヤ塚古墳	奈良県高市郡明日香村大字奥山308	29402	13-D-37	34° 29' 15"	135° 49' 22"	201310～201312	学術
神明神社古墳	奈良県葛城市寺口大字和田1089	29211	14-D-15	34° 29' 26"	135° 42' 39"	201312～201401	学術
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
カセヤ塚古墳	古墳	古墳時代	-	-		-	
神明神社古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	-		-	